



2008年6月4日放送

消化器領域と漢方医学

東海大学 医学部 東洋医学講座 准教授 新井 信

(1) 消化器領域における漢方医学の捉え方

本日から9回にわたり「消化器領域と漢方医学」について、お話しします。

まず第1回目の今日は、「消化器領域における漢方医学の捉え方」について、総論的な内容をお話ししたいと思います。本題に入る前に、まず実際の臨床における漢方の運用方法について復習しておきましょう。

〈漢方の運用方法〉

よく「漢方」と「随証治療」はペアで語られますが、日常診療で漢方薬を運用する場合、処方選択の根拠は必ずしも随証治療だけではありません。これをまとめてみましょう。

まず「漢方的な考え方に従った運用」です。これは漢方の古典的な病態把握方法に基づいて処方を決定する場合で、広義の随証治療と言ってよいでしょう。水を飲みたがり飲むとすぐに吐いてしまう状態を水逆と考えて五苓散を用いたり、赤く熱感を伴った急性蕁麻疹を表実証と捉えて葛根湯を応用したりする場合があります。

次に「古典の条文に基づいた運用」です。これは狭義の随証治療ということですが、例

例えば麦門冬湯を「大逆上気、咽喉不利」という条文にしたがって、喉に不快感があって顔を真っ赤にして咳き込む人に用いる場合などです。

また「生薬の古典的組み合わせに基づいた運用」という場合もあります。例えば竜骨牡蛎のペアは動悸や神経過敏などの交感神経緊張症状に対して、厚朴蘇葉のペアは咽のつまり感や息苦しさなどの気うつ症状に対して考え、それらを含む処方を用います。

さらに、日常診療では「口訣による運用」もよく行います。口訣とは名医が残した経験的使用目標で、例えば大塚敬節先生は「早朝の頭痛には釣藤散がよい」と述べています。

以上の4つは漢方医学的立場に立った用い方ですが、実際の臨床では、「エビデンスに基づいた運用」のように、漢方薬を西洋医学的に運用する場合も少なくありません。例えば、運動不全型 NUD に対して六君子湯は全般改善度を有意に向上させるという二重盲検ランダム化比較試験の結果が報告されています。このスタディは質の高いエビデンスですので、これを根拠に六君子湯を用いる立場があってもよいでしょう。

その他にも、生薬の薬理成分に基づいた「生薬薬理的な運用」なども考えられます。

どの運用方法を選択するかは、処方する医師や薬剤師の漢方への理解度や経験によってよいと思います。もちろん漢方的な運用方法が基本かつ重要ですが、目の前の患者を治すという立場に立てば、さまざまなアプローチを知り、手の内を広く持つことが大切です。

〈西洋医学と漢方〉

以上のことを踏まえて、漢方治療という観点から消化器領域の特徴を考えてみましょう。

まず第1に、消化器領域はある意味、西洋医学が漢方に急速に近づいてきた領域だと思えます。本来、漢方治療は自覚症状、例えば、胃もたれとか胸やけなどの自覚症状に基づいて処方を決定しますが、一方で西洋医学は器質的病変、例えば、以前は慢性胃炎という病理学的診断を臨床応用して治療方針を決めていました。ところが、このような疾病分類は臨床現場では非効率的であるため、1990年前後から上部消化管領域において、NUD、ノンアルサー・ディスペプシアという機能による分類が提唱されました。

さらに、その後下部消化管における過敏性腸症候群という概念も含めて、消化管全体の機能失調という観点から FGIDS、機能性胃腸障害という概念が生まれました。こうなると、今や消化器領域はまさに機能による分類、自覚症状による分類が主流となった、すなわちそのような意味で西洋医学が漢方に非常に近づいてきたわけです。ですから、西洋医学的病名にしたがって漢方薬を効率的に運用できるようになり、運動不全型 NUD に対する六君子湯、過敏性腸症候群に対する桂枝加芍薬湯などの質の高いエビデンスが多く作られるようになりました。

〈脾虚と全身症状〉

また、漢方的な観点からも、消化器、特に消化管は治療を行う上でのキーポイントになります。「補土派」で有名な李東垣は『脾胃論』という書物の中で「人をして、百病は皆、

脾胃の衰えるに由りて生ず」と述べ、胃腸虚弱である脾虚は諸病の根源だと説いています。

また、食物の中にある「大地の気」は脾胃が門戸となって全身に巡るとされるため、脾の機能が衰えると気を体内に十分に取込みえず、気虚に陥ってしまいます。このような状態では、飲食物だけでなく、すい水の停滞も来すため、浮腫や下痢、小便不利などの水毒症状を招く恐れもあります。さらに、『黄帝内経』素問、陰陽応象大論篇に「脾は肉を生ず」とあるように、脾胃を補うことで虚弱な筋肉の質や量が改善し、腰痛や肩こりが軽減する場合もあります。その他、『難経』四十二難に「脾は血をつつ裏むを主る」とあるのは、脾には血を調整する作用があるという意味で、このことは脾の失調が、例えば慢性的な血便、女性では月経過多や子宮出血などの出血傾向の原因にもなり得ることを示唆しています。このように、衰えた脾胃を補うことで、単に胃腸機能が向上するだけではなく、全身に生じた種々の不都合な症候が改善することも期待できるのです。

〈心身相関〉

次に、消化器領域は心身相関が非常に強いという特徴があります。このことは、昔から「はらわたが煮えくりかえる」とか、「腹の虫がおさまらない」という言葉があることから容易に理解できると思います。西洋医学は本来、心身二元論的な立場をとって発展してきましたが、漢方ではその考え方の基本に「心身一如」、すなわち精神症状も身体症状も分け隔てなく考える立場をとっています。この意味でも心身相関が強い消化器領域は漢方の特性を生かせる、使用するメリットが大きい領域だと考えられます。

〈悪性腫瘍〉

最後に、忘れてはならない特徴として、消化器領域はやはり悪性腫瘍が多いということがあげられます。2005年のWHOの統計によれば、悪性腫瘍による死亡は肺癌に次いで、胃癌、肝癌、大腸癌と消化器癌が大きなウエイトを占めています。癌治療に漢方がどう寄与できるかはこのシリーズの最後にまとめてお話しいたしますが、漢方治療を行う場合、つねに西洋医学的診断を怠らず、とくに悪性腫瘍はけっして見落としてはいけないということを肝に銘じてください。

〈おわりに〉

最後になりましたが、重要なことですので一言付け加えたいと思います。

漢方は西洋医学とまったく異なった診断治療体系をもつ「もう一つの医学」です。しかし、この両医学は対立するものではなく、それぞれの長所と短所を相補って、患者のために統合されるべきものだと考えています。したがって、消化器領域においても、漢方に片寄ることなく、常に両方の医学の目を通して患者を診断し、「もしも自分自身や自分の家族が患者であったらどうするのか」と自問しながら、納得のいく治療法を選択されるとよいでしょう。